NEWS LETTER
EMECS
International EMECS Center
No.37
ISSN 0919-7052 March 31, 2017

第11回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS11）報告

変動する世界における沿岸域・コミュニティのリスクマネジメント

（公財）国際エメックスセンターでは、第11回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS11）を、ロシア連邦・サンクトペテルブルクにおいて、2016年8月22日から27日まで6日間にわたり、ロシア科学アカデミー世界海洋ワーキンググループ（Sea Coasts）とのジョイント会議として開催しました。

会議は、「変動する世界における沿岸域･コミュニティのリスクマネジメント」をテーマとしており、世界22カ国から306名の研究者などが参加しました。

日本からは金澤和夫兵庫県副知事、(公財）国際エメックスセンター鈴木基之会長、兵庫県議会の訪問団（団長:藤本百男副議長）をはじめ、閉鎖性海域の環境に関する研究者など約80名が参加しました。会議では、開会式及び全体セッションに引き続き、「ICMと里海特別セッション」や3会場に分かれての分科会、「青少年環境教育交流（SSP）セッション」が行われ、130の口頭発表と116のポスター発表が行われました。

閉会式においては、「サンクトペテルブルク宣言」と「青少年環境教育（SSP）宣言」が採択されるとともに、次回の第12回エメックス会議が2018年にタイ王国・パタヤで開催されることがアナウンスされました。

この他、8月25日午後には、サンクトペテルブルク市内ツアーが、また、最終日の8月27日には洪水防御ダムなどを見学するテクニカルツアーが開催されました。

会議プログラム

	（午前）	（午後）	（夜）
8月22日(月)		参加登録	
8月23日(火)	開会式 開会セッション	ICMと里海特別セッション 口頭発表	開会レセプション
8月24日(水)	口頭発表 SSP挨拶・レクチャー	口頭発表 SSPディスカッション ポスターセッション	
8月25日(木)	口頭発表 SSP口頭発表	サンクトペテルブルク市内ツアー	
8月26日(金)	口頭発表 SSP口頭発表	閉会セッション 閉会式	ガラディナー
8月27日(土)	テクニカルツアー（洪水防御ダム・クロンシュタット）		

目次

第11回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS11）報告…… 1～4
サンクトペテルブルク宣言…… 5
青少年環境教育交流（SSP）宣言（抜粋）…… 6
JICA研修報告…… 7
エメックス活動の成果報告…… 8

□**会議名称**
EMECS11 − Sea Coasts XXVI ジョイント会議
□**テーマ**
変動する世界における沿岸域・コミュニティのリスクマネジメント
□**開催期間**
2016 年 8 月 22 日（月）～ 27 日（土）
□**開催場所**
ロシア連邦・サンクトペテルブルク
□**会場**
アジムットホテル、ロシア国立水文気象大学、A.P. カルピンスキーロシア地質調査研究所
□**主催**
公益財団法人国際エメックスセンター
ロシア科学アカデミー世界海洋ワーキンググループ（Sea Coasts）
□**現地事務局**
ロシア国立水文気象大学
A.P. カルピンスキーロシア地質調査研究所
ロシア科学アカデミー P.P. シルショフ海洋学研究所

■ 開会式

開会式は、8 月 23 日（火）9 時 30 分から、主会場であるアジムットホテル 2 階のアジムットホールにおいて、現地組織委員会副代表であるジョージ・ゴゴベリーゼ氏（ロシア国立水文気象大学）の司会により開催されました。

まず、開催にあたって、イワン・セレブリスキー氏（サンクトペテルブルク市環境副委員長）、金澤和夫氏（兵庫県副知事）、レオニット・ジンダレフ氏（ロシア科学アカデミー Sea Coasts 代表）、ヴァレリー・ミハイエフ氏（ロシア国立水文気象大学長）など、ロシア・日本双方の関係者 7 名による挨拶が行われました。

（開会式：アジムットホール）

最後に、現地会議事務局のアレクサンドラ・エルショワ氏（ロシア国立水文気象大学）から、今回の会議の全体説明が行われました。

■ 開会セッション

コーヒーブレイクの後、10 時 20 分から同会場において、渡邉正孝氏（国際エメックスセンター科学・政策委員長）の司会により全体セッションが行われました。

全体セッションでは、アンドレイ・ザツェーピン氏（P.P. シルショフ海洋学研究所）、鈴木基之氏（国際エメックスセンター）、エヴァンゲロス・パパサナシオ氏（ギリシャ海洋研究センター）の基調講演が行われました。

基調講演の終了後、参加者全員によるフォトセッション（記念撮影）が行われました。

（渡邉正孝科学・政策委員長）

■ 口頭発表（分科会）

口頭発表は、8 月 23 日（火）から 26 日（金）まで、アジムットホテル、及び、ロシア国立水文気象大学において、それぞれ 3 会場に分かれ 130 の口頭発表が並行して行われました。

（分科会：ロシア国立水文気象大学）

口頭発表のテーマは次のとおりです。

- 統合的沿岸域管理（ICM）と里海
- 沿岸浸食と沿岸域の動力学プロセス
- 沿岸域及び海洋域の生態系：調査とモデル化
- ロシアの干満のない海の開発の沿岸域予想
- 沿岸域資源の持続可能な利用と開発：効果的な管理とアプローチ
- 沿岸域システムとその動態（沿岸から海へ、海から沿岸へ）
- 変動する世界における気候変動：気候変動に対する沿岸域の適応策
- 沿岸域の自然災害リスクに対する保全と軽減：BRICS 関係国特別セッション

■ ポスターセッション

ポスターセッションは 8 月 24 日（水）16 時から 18 時の間、アジムットホテル・アジムットホールにおいて開催され、一般 101 件、SSP15 件の合計 116 件の発表がありました。

会場では、会議参加者と発表者の熱心な質疑応答や意見交換が行われました。

（ポスターセッション）

また、8 月 25 日（木）にルーベン・コシアン氏（P.P. シルショフ海洋学研究所）を委員長とするベストポスター賞選考委員会が開催され、一般 6 件、SSP3 件の優秀ポスター賞が選定されました。

■ 閉会セッション

8 月 26 日（金）14 時からは、今回の会議の締めくくりとしての全体セッションが、アジムットホテル・アジムットホールで開かれ、アンドレイ・ザツェーピン氏（P.P. シルショフ海洋学研究所）が座長となり、ウラジミール・クドリャツェフ氏（ロシア国立水文気象大学）、陳中原氏（華東師範大学）、松田治氏（国際エメックスセンター）の講演がありました。

（アンドレイ・ザツェーピン氏）

■ 閉会式

コーヒーブレイクの後、16時30分から閉会式が開催され、渡邉正孝氏（国際エメックスセンター）による会議総括が行われ、今回の会議の成果などが報告されるとともに、開催関係者に対する謝辞が述べられました。

また、SSPセッション参加学生が分担して「青少年環境教育交流宣言（SSP宣言）」が朗読されると会場からはスタンディングオベーションで賛辞が送られました。

（ベストポスター賞授賞式）

続いて、デイヴィッド・ネマジー氏（米国・メリーランド大学）から「サンクトペテルブルク宣言」が読み上げられ参加者全員で採択されました。

ルーベン・コシアン氏（P.P.シルショフ海洋学研究所）からはベストポスター賞選考委員会で選定されたベストポスター賞（一般6件、SSP3件、合計9件）の発表が行われ、受賞者が紹介され記念品が手渡されました。

最後に、ピアムサック・メナサウェイド氏（タイ・チュラロンコン大学）から、第12回エメックス会議は2018年にタイ王国・パタヤで開催される予定であることがアナウンスされ、参加が呼びかけられました。

閉会式終了後には、ガラディナーが催され、会議の成功を祝うとともに、次回のエメックス会議に向けて各国の参加者同士の交流が深められました。

（ガラディナー）

■ テクニカルツアー

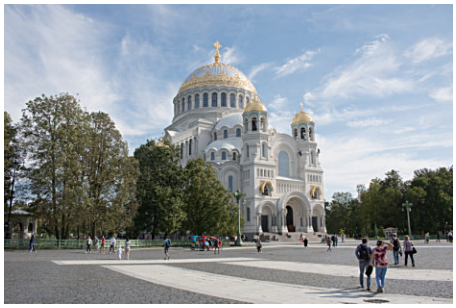
日　時：2016年8月27日（土）終日
訪問先：サンクトペテルブルク洪水防御ダム、クロンシュタット市内

フィンランド湾東部にある、サンクトペテルブルク洪水防御ダムは、高潮による洪水からサンクトペテルブルクを防護するために建設され、2011年8月12日に竣工しました。この洪水防御ダムは、ロモノソフ（南側）からクロンシュタット（コトリン島）を通り、ゴルスカヤ（北側）まで、全長25.4kmの橋を兼ねたダムであり、水位上昇が4.55mまでならば、サンクトペテルブルクの街を防護することが出来るとされています。このダムは環境に配慮しており、フィンランド湾の水とネヴァ川の水とが往来できる場所を数か所設けており、海底トンネル（全長1,961m：海底部分1,189m）や垂直に移動する可動橋により、船を通過させることが可能です。

（洪水防御ダム見学）

竣工以来5年で5回、水門を閉めた経験があり、閉めるのに要した時間は約45分との説明がありました。

また、クロンシュタットでは海の大聖堂の見学や、湾内を遊覧船で観光するなど、市内観光も行いました。



（クロンシュタットの大聖堂）

統合的沿岸域管理（ICM）と里海特別セッション

8月23日（火）14時からアジムットホテル18階ベルリンにおいて、柳哲雄氏（国際エメックスセンター）を座長として、「ICMと里海特別セッション」が開催されました。

まず、特別セッション開催にあたり、金澤和夫氏（兵庫県副知事）から挨拶をいただきました。その後、口頭発表が行われ、パート1として「日本におけるICMの特別プロジェクトの紹介」、パート2として「ICMと里海に関する国際事例研究」と題して合計10名によるプレゼンテーションが行われました。

パート1においては、柳哲雄氏が研究代表となり実施している環境省環境研究総合推進費による戦略研究プロジェクト「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」の5つの研究テーマについて、それぞれのテーマリーダー等が研究内容の紹介を行いました。

また、パート2においては、日本、米国をはじめ、フィリピン、インドネシア、ロシアにおけるICMと里海に関する取り組み状況が各国の関係者から報告されました。

（セッション座長・柳哲雄氏）

セッションプログラム

【パート1:日本におけるICM特別プロジェクトの紹介】

- **柳　哲雄**（国際エメックスセンター）「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」（イントロダクション）
- **奥田哲士**（龍谷大学）「河川からのシルトと粘土の行方とその透明度への影響」（テーマ1：瀬戸内海）
- **小松輝久**（東京大学）「リアス式海岸における持続可能な沿岸域利用を実現するための里海アプローチ：2011年3月11日の巨大津波の被害を受けた三陸海岸志津川湾の事例」（テーマ2：三陸海岸）
- **吉田尚郁**（環日本海環境協力センター）「国際的閉鎖性海域・日本海の持続可能な利用のためのマネジメント」（テーマ3：日本海）
- **仲上健一**（立命館大学）「生態系サービスにもとづく統合的沿岸域管理」（テーマ4：社会人文科学）

【パート2：ICMと里海に関する国際事例研究】

- **根木桂三**（環境省）「水環境管理の手法」（日本）
- **ロバート・サマーズ**（メリーランド大学）「沿岸海域の効果的で持続可能な保全と再生に向けて：チェサピーク湾総量規制計画」（米国）
- **デイヴィッド・ネマジー**（メリーランド大学）「バエ湖の環境健康度レポートカードの開発」（フィリピン）
- **スヘンダル・サコマル**（技術評価応用庁）「インドネシア沿岸域における里海をモデルとした生産性改善のための持続可能な養殖の実践」（インドネシア）
- **ルーベン・コシアン**（シルショフ海洋学研究所）「ロシア沿岸域類型化のための基礎的指標の開発」（ロシア）

■　ディスカッション

発表全体を通しての議論では、「日本とアメリカの総量削減政策の違いは何か」「各企業を総量削減に協力させるためにはどうすればよいか」「海の健康診断を行う頻度はどう決めるのか」「マイクロ・プラスチックを含む海ごみ対策はどうすればよいか」などに関して活発な議論が行われ、今後、さらにICMと里海に関する国際セッションを続ける必要があることが確認されました。

青少年環境教育交流（SSP）セッション

エメックス会議では、2003年にタイ王国・バンコクで開催した第6回エメックス会議以降、次世代の環境保全活動を担う環境教育の推進に資するため、青少年環境教育交流セッション（The Students and Schools Partnership Session: SSPセッション）を開催しています。第11回エメックス会議においては、ロシア9名、アメリカ2名、日本2名の合計13名の学生が参加しました。

最初のプログラムとして、8月24日（水）10時30分から、A.P.カルピンスキーロシア地質調査研究所において、「気候変動と沿岸海域の展望」として、ダリア・リャブチュク氏（同研究所）からバルト海について、マイケル・ハーディスティ氏（ワシントンカレッジ）からチェサピーク湾について、柳哲雄氏（国際エメックスセンター）から瀬戸内海について、ジャン-ポール・デュクロトワ氏（ハル大学）から北海についての講演がありました。また、午後は同研究所の博物館を見学し、その後、16時からはアジムットホテルで開催されたポスターセッションに参加し、ポスター発表を行いました。

8月25日（木）及び26日（金）には、ロシア国立水文気象大学で、ウェイン・ベル氏（ワシントンカレッジ）及びダリア・リャブチュク氏が共同座長となり参加者による口頭発表や討議が行われました。

8月26日（金）午後に行われた閉会セッションで、林由真さん（日本）、セルゲイ・キリレンコさん（ロシア）、キルスティン・ウェブさん、エリカ・クーンツさん（米国）の3組（4名）がベストポスター賞を受賞しました。

また、参加者の討議を経て作成したSSP宣言を、参加者6名が分担して発表しました。

この他、8月23日（火）の午後に開催されたサンクトペテルブルク市内ツアー及び27日（土）に開催されたテクニカルツアーにも参加し、見聞を深めました。

(A.P. カルピンスキーロシア地質調査研究所前)

（ディスカッション）

サンクトペテルブルク宣言

EMECS11－SeaCoasts XXⅥジョイント会議のテーマは、「変動する世界における沿岸域・コミュニティのリスクマネジメント」である。

日本におけるコウノトリの野生復帰、1970年代に絶滅したがロシアから幼鳥がもたらされ今では90組もが生育するようになった例がある。

これが示すように、再生には時間がかかるものであり、しばしば国際的な協力を必要とし、それは効果を生むものである。このことは、特に閉鎖性海域のような生態系、すなわち、複数の国にまたがり、人口密度も高く、漁業、海運業などの重要な産業に利用され、また、大災害への脆弱性を伴うところでは、より重要であろう。

科学者、ステークホルダー、環境管理に携わる者、政治家などが関与し合うことにより、環境汚染は軽減できるものであり、環境は、修復、再生の長い道のりを歩み始めることができる。

例えば､50年以上も前に､科学者は､富栄養化と貧酸素水塊､藻場･漁獲高の減少とを関連付けた。科学者は､栄養塩負荷を低減することにより沿岸域システムが再生の道を辿り始めたことを示している。このような変化は「里海」のような、科学者、ステークホルダー、環境管理に携わる者、政治家などが積極的に力を合わせている「共有されたガバナンスシステム（shared governance systems)」に適応したシステムのみに見ることができる。加えて、バルト海のフィンランド湾、黒海、日本海、北極海のような大規模閉鎖性海域において、新たな国際協力をより緊密に構築することが、我々が直面しているグローバルな課題の解決に導いてくれるであろう。

この再生ネットワークは、これまでに増して強固になって来ている。しかし、新たな脅威も生まれて来ていて、そのためには国際的な協力が必要であり、我々は目が離せない。

地球の温度上昇の度合が高まり、それによって北極海の氷塊が溶けて海面上昇を引き起こし、風や海流も変化させて、洪水も頻発している。また、インフラや人の健康・安全も脅威にさらされている。加えて、マイクロプラスチック、海の酸性化、有害な赤潮などが我々の注意を喚起している。これは、我々が重要な手立てを打つまでに、更に50年もかけられないことを意味している。

よって、我々は、次の通り宣言する。科学者達は、課題を発見した時点から、コミュニティが協働して効果的な取り組みを始めるまでの時間を短縮するよう共に努めなければならない。そうすることにより共有されたガバナンスシステムがより功を奏するだろう。

このことは、若者や声を上げにくい立場のステークホルダーの新たなパートナーシップと教育のネットワークを求めている。それには、ローカルレベル、地域レベル、国際レベルのコミュニティを巻き込み、素早く対応するためのガバナンスモデルの強化が必要となる。

ここまで我々は、大きく進歩してきた。しかし、これからは、世界が現在経験している変化の速度に遅れずに適応していかなければならない。

（デイヴィッド・ネマジー
宣言文起草委員会委員長）

ロシア連邦サンクトペテルブルク
2016年8月26日
（事務局仮訳）

青少年環境教育交流（SSP）宣言（抜粋）

変動する世界への適応：コミュニケーション、教育、行動の向上

この宣言文はロシア連邦・サンクトペテルブルクで開催された「EMECS 11 − Sea Coasts XXVI ジョイント会議」に参加した日本、ロシア、米国の 13 名の学生によって作成された。主催者からの暖かい歓迎、全体会議の素晴らしい発表、セッションの議長と実行委員会の方々のご尽力、第 6 回 SSP セッションに参加した学生と教育者による実りある交流を持てた事に、私たちは心から感謝の意を表したい。

SSP セッションに於いて、一般市民に科学的知見が明確に伝えられていないこと、それ故に、理解を得られなかったり、効果的な行動が取られないことがわかった。サイエンスは、ごく普通の人達にも手の届くものでなければならず、そのためには、明確でわかりやすい言葉でもってメッセージを伝えるべきだ。
メッセージは、共感の持てる形で表されるべきであり、そうすることによって、科学的な知見と一般の人の持つ理解とのギャップが埋められるだろう。知識の伝達方法をさらに改良することも教育制度の中に取り込む必要がある。

もし、あらゆる場面で環境教育が欠如しているとなると、一般市民が環境問題に取り組むのに遅くなったり、あるいは全く市民が存在しないことになる。行動を起こすためには、まず我々の環境教育を根本から変革しなければならない。これを実現するためには、実践的な学習や、あるいは、現在、喫緊の環境課題である「気候変動」について、課題解決型のカリキュラムを取り込むことなどが考えられる。このようにして一般の人々を巻き込むことで、生涯学習をする人達のネットワークが構築され、ひいては科学的な知見と一般市民の理解との格差を少なくすることができるだろう。一旦知識を身に着けた人々は、自らの理解したことを政治的な領域にまで踏み込んで適用し、環境の重要性を唱え、政府に行動を求めるであろう。

個々人のレベルでも、行動を起こすことは重要であるが、コミュニティレベルで協働することは不可欠である。変動する世界に適応していくためには、ローカルレベルのみならず、地域、また更にはグローバルなコミュニティでの知識の共有が必要である。問題の重要度に応じた解決策を見つけるためには、協働しなければならない。

世界全体の問題に対する解決策を作り出すための課題や進捗状況について学ぶ機会を与えていただいたことに感謝する。さらに、文化、言語、規範などの差異を克服すれば、より強固なソリューションを生み出すことができ、将来に向けてよりよい備えができるだろう。

（学生による SSP 宣言の発表）

何事も一人では変えられない。しかし、もし、何百万人もの人が、一人一人はささやかでも、環境を守るために変化を起こせば、地球の状態は変わるだろう。私たちのような若い世代は、地球を共有するすべての生き物のために、私たちの環境を保全する意思と努力を、手と手を携えて受け継いでいかなければならない。何ができるのか、一緒に考えようではありませんか。

ロシア連邦サンクトペテルブルク
2016 年 8 月 26 日
（事務局仮訳）

JICA研修報告

（公財）国際エメックスセンターでは、（公財）国際湖沼環境委員会（ILEC）が（独法）国際協力機構（JICA）から受託した平成28年度JICA研修「統合的流域（河川・湖沼・沿岸域等）管理による水資源の持続可能な利用と保全（Integrated basin management for sustainable use and preservation of water resources (lakes, rivers and coastal waters)」コースの、沿岸域に関する研修をILECより依頼され実施しました。

本研修はILECが2005年度から2015年度までの11年間実施していた「湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理（Integrated basin management for lake environment）に続くコースで、流域管理に携わる、開発途上国の技術系行政官や研究者等を対象にした研修です。

河川や湖沼、沿岸域等の多くのステークホルダーが関係する流域管理では、組織体制、政策、参加、技術対応、情報、財源の6課題分野を統合して一体的に水資源の持続可能な利用と保全を進めることが重要です。

この研修は、統合的湖沼流域管理（Integrated Lake Basin Management；ILBM）を出発点に、湖沼、河川、沿岸域を含む静水、流水システムの適切な管理のあり方について理解を強化することにより、開発途上国の流域管理のガバナンス向上に寄与することを目的としています。

＜2016年度の概要＞

研修期間：8月15日（月）～10月15日（土）の2ヶ月間

研修員：アルバニア、エジプト、インド、イラク、メキシコ、ミャンマー、フィリピン、スーダン　各1名およびウガンダ2名の計9カ国10名

研修実施機関：ILEC、滋賀県、琵琶湖環境科学研究センター、琵琶湖博物館、淀川河川事務所、国際エメックスセンター等

＜国際エメックスセンターが担当した研修＞

持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法について、瀬戸内海等の沿岸海域の対策や現状についての講義および関連するサイトの視察と解説を担当しました。

（講義）

研修日時：9月15日（木）～9月16日（金）の2日間

研修内容

15日（午前）：**講義**　日本における里海活動の概要と実績および教訓（Concept and Practices of Satoumi in Japan and Lessons Learned）

同日（午後）：**講義**　世界の閉鎖性海域における環境管理(Environmental Management of Enclosed Coastal Seas in the World)

講義　瀬戸内海における環境管理（Environmental Management of the Seto Inland Sea）

16日（午前）　国際エメックスセンター尼崎浄化実験施設の見学（施設の紹介、現地視察、簡易水質分析や二枚貝による水質浄化の実習）

（二枚貝による水質浄化実習）

同日（午後）　阪神南県民センター　尼崎運河水質浄化施設の見学（尼崎２１世紀の森づくり構想、浄化施設の説明、浄化施設見学）

尼崎港管理事務所　尼崎閘門（尼ロック）の見学（施設の説明および見学）

（尼崎閘門の見学）

エメックス活動の成果報告

ECSA56 会議（ドイツ・ブレーメン）参加報告

2016 年 9 月 4 日～7 日にかけて、ドイツ・ブレーメンで河口域・沿岸科学学会（ECSA）による国際会議 ECSA56 が「Coastal systems in transition：From a ‘natural’ to an ‘anthropogenically - modified’ state」をテーマに開催されました。国際エメックスセンター（以下、エメックス）は、当会議の趣旨に賛同してスポンサーとなり、「エメックスセッション」の開催とエメックス学生発表賞の授与を行いました。

ECSA56 会議全体の参加者は約 500 名で、5 会場において 5 分野 36 トピックスに及ぶ幅広い内容で通常セッションと特別セッションが開催され、約 300 の口頭発表と約 200 のポスター発表が行われました。

■セッショントピックス（一部抜粋）

- Coastal morphodynamics affected by engineering structures and sea level rise
- Monitoring with coastal ocean observing systems
- From catchment to coast: effects of land use change and hydrological regulations
- Biodiversity in coastal systems
- Implications of resource use patterns and Management for the environment
- Marine and coastal spatial planning / decision support
- Valuing marine ecosystem services

当会議にはエメックスから松田治副理事長（広島大学名誉教授）、柳哲雄特別研究員（九州大学名誉教授）、エリック・ウォランスキー科学・政策委員（オーストラリア・ジェームスクック大学教授）が参加しました。

会議 2 日目に開催されたエメックスセッションではウォランスキー教授と松田副理事長が共同座長を務め、日本、スウェーデン、ドイツからの参加者による 5 つの発表が行われました。エメックスからは、柳特別研究員による環境省環境研究総合推進費 S-13 プロジェクト「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」の発表、松田副理事長による「近年の瀬戸内海の環境管理政策の転換と生態系サービスの最大化」の発表が行われ、いずれも好評で活発な質疑応答が行われました。

また、会議期間中には、生態系ネットワークの解析手法に関するワークショップ「Ecosystem Network Analysis」や、学生・若手研究者を対象に国際的な学術誌への論文投稿・発表等に関するワークショップ「Publishing and Reviewing in International Journals」が開催され、若手研究者がレベルの高い指導を受けることができる機会となりました。

会議最終日には、松田副理事長とウォランスキー教授からエメックス学生発表賞が優秀な口頭発表 2 件（ニュージーランド、チリ）とポスター発表 2 件（ドイツ、オランダ）に対し授与され、会議参加者から受賞者に大きな拍手が送られました。

エメックスが当学生発表賞のスポンサーとなるのは当会議で 4 回目となります。この賞が受賞者達の研究意欲を刺激し、河口域・沿岸域研究の将来を担う専門家になることを期待しています。

（エメックス学生発表賞授賞式）

事務局からのお知らせ

ご賛同いただけるみなさまのご協力、ご参加を心よりお待ちしています。また、みなさまのお近くの方にも是非、本会をご紹介ください。

《年会費》

団体会員	100,000 円
NGO 団体	30,000 円
個人会員	10,000 円

《特典》

1. 当センターが主催または共催するシンポジウムセミナー等に優先的に参加することができます。
2. 当センターが有する最新の情報の提供を受けることができます。
3. 当センターが実施する調査研究プロジェクトの形成などに参加できます。

※入会を希望される方は、国際エメックスセンター事務局までお問い合わせください。

投稿募集 閉鎖性海域に関する研究や活動、会議、図書等の情報提供をお待ちしております。

編集・発行及び連絡先 公益財団法人 国際エメックスセンター
651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1 丁目 5 番 2 号 人と防災未来センター 東館 5F
TEL：078-252-0234 FAX:078-252-0404
HP：http://www.emecs.or.jp E-mail：secret@emecs.or.jp

※このニュースレターは再生紙を利用しています。